



2025 年 11 月 14 日

報道関係者 各位

脊椎手術の術後感染、「過去の入院歴」が大きく影響する可能性 －群馬大学らが 3,275 例を解析し、新たなリスク因子を明らかに－

群馬大学大学院医学系研究科整形外科学の研究グループは、群馬県内の大学病院・基幹病院・脊椎専門病院の 3 施設（群馬大学医学部附属病院、前橋赤十字病院、群馬脊椎脊髄病センター）と共同で、2019 年から 2024 年に行われた 3,275 例の脊椎手術データを解析し、「過去の入院歴」が術後の創部感染（SSI）（*1）リスクを大幅に高めることを明らかにしました。

その結果、術後の深部創部感染は 1.2%（40 例）に発生し、過去に 2 日以上入院歴がある患者さんは、入院歴のない患者さんに比べて感染リスクが約 7 倍に上昇することが分かりました

（感染率 入院歴あり：4.0% vs. なし：0.6%）。

さらに、入院から手術までの期間が短いほど、MRSA（多剤耐性黄色ブドウ球菌）などの薬剤耐性菌（*2）による感染が起きやすい傾向が確認されました。

この研究成果は、脊椎手術の安全性向上に向けた新しい視点を提供するものであり、「入院歴」という日常診療で容易に得られる情報が、「手術タイミングの判断」や「感染対策の強化」に活かせる可能性を初めて示しました。

本研究成果は 2025 年 11 月に国際医学雑誌『Spine Open』に掲載されました。

1. 本件のポイント

- 脊椎手術後の創部感染は、入院期間の延長・医療費の増加・生活の質の低下などを引き起こし、時に生命にも関わる重要な合併症である。
- これまでの研究では、肥満や糖尿病（体質や持病による個人差）、手術時間・出血量（手術による身体への負担）などがリスク因子として知られている。
- 本研究では新たに「過去の入院歴」に着目。
- 「入院歴」を 過去の 2 日以上入院と定義（1 泊の検査入院は含めない）。
- 入院歴がある患者さんでは、術後感染が約 7 倍増加し、さらに薬剤耐性菌による感染の割合も高かった。
- 前回の入院から手術までの期間が短いほど、薬剤耐性菌感染の割合が高いことを初めて示した。

2. 研究成果の意義と今後の展望

本研究では、過去の入院歴が、患者さんの体内細菌バランスや薬剤耐性菌の保菌に影響を及ぼす可能性を明らかにしました。

今後、緊急手術を除く場合には、前回入院から一定期間を空けて手術を行うなど、患者さんごとに最適な手術時期を相談できる可能性があります。

3. 掲載論文

掲載雑誌：Spine Open (国際的に評価されている脊椎脊髄疾患に関する国際医学雑誌)

<https://doi.org/10.1097/bn9.0000000000000023>

タイトル：Prior Hospitalization as an Independent Risk Factor for
Surgical Site Infection in Spinal Surgery:
A Retrospective Multicenter Study of 3,275 Cases

筆頭著者：中島 知貴 (Tomoki Nakajima)

責任著者：高澤 英嗣 (Eiji Takasawa)

研究代表者：筑田 博隆 (Hirotaka Chikuda)

所 属：群馬大学大学院医学系研究科整形外科学

【本件に関するお問合せ先】

群馬大学大学院医学系研究科 整形外科学 研究員 高澤 英嗣 (たかさわ えいじ)

【取材に関するお問合せ先】

群馬大学昭和地区事務部総務課広報・保健学庶務係

TEL：027-220-7895、FAX：027-220-7720

E-MAIL：m-koho@ml.gunma-u.ac.jp

【用語解説】

*1 術後創部感染 (SSI)

手術部位に細菌が感染して傷が治りにくくなる合併症。重症化すると長期間の抗生剤治療や再手術が必要となり、時には敗血症（はいけつしょう）で生命の危険を伴うこともある。

*2 薬剤耐性菌

ふだん効く抗生物質が効かなくなった細菌。感染症が治りにくくなり、重症化や治療が難しくなる場合がある。